

皮膚科学の発展を目指して

新年あけましておめでとうございます。読者の皆様には晴ればれしいお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。

去年は、火山の噴火、台風の来襲などの自然現象の乱れ、世界的なテロ事件の頻発などのうれしくないニュースが続きましたが、同時に、世界ラグビーでの快挙、日本人のノーベル賞受賞などのうれしいニュースも舞い込みました。とくに北里大学特別荣誉教授の大村智先生によるイベルメクチンの発見が対象に選ばれたことによって、ノーベル賞が私たち皮膚科医にも身近なものになったように思っています。さて、今年はどんなうれしいニュースが入ってくるのか期待が膨らみます。

今年は医療費改定の年である。流れてくる噂ではマイナス改定とのことで、皮膚科診療の先行きに不安が募っている。「皮膚科の収益が高い」ということで、いじめの対象にされるのは残念なことである。去年のeditorialにも書かせていただいたように、病院皮膚科に危機が押し迫っている。何とか圧力を押し返す力を作らなければと願っているのだが。

この数年、趣味で皮膚科学の原著を渉猟している。語学力の貧弱さのため、すべてを理解できていないが、1723年に発刊されたDaniel TurnerのDe Morbis Cutaneisのコピーを読む機会を得た。この書は、英語で書かれたもっとも古い皮膚科の教書である。当時の皮膚科学は、Leprosy, Itch (pruritus), 子供のかさぶた、ヘルペス、皮膚細菌感染症、天然痘、癌、先天異常、疣贅、発汗異常、色素沈着、脱毛、酒皰、寄生虫疾患などを対象疾患としており、さらに、排尿障害や痔疾、外傷などといった現在の皮膚科で扱わなくなっている疾患も含まれており、それぞれの病気に対する治療法・処方が詳細に記述されている。抗生物質、抗真菌薬、ステロイドをはじめとする種々の治療薬がなかった時代での治療の苦労がしのばれる記載となっている。歴史発展上、皮膚科では、内科的なアプローチと外科的なアプローチの両面で治療が組み立てられてきた。今でもドイツの皮膚科では、Proctology (直腸肛門領域)が含まれているのだそうで、日本の文部科学省の分類でも、皮膚科は外科系に属している。

現在の皮膚科学は、だんだんスリムになり、扱う疾患の種類も減少しているようである。個々の疾患についての情報量が増加したためか、あるいは医療訴訟の絡みもあってか、他科に送ってしまう症例が多くなっていると聞く。たとえ他科に送ることになろうとも、その患者の主導権を握って、他科医にアドバイスができる力を持つことが必要ではなかろうか。皮膚科の広い守備範囲を少しでもスリムにしたいという気持ちはわかるが、全医学的視野からの皮膚科学を考え直す時期に来ているのではなかろうか。若い皮膚科医の活躍を期待している。本誌もお手伝いできればと考えている。

西岡 清